

「耕雲紀行」注釈(四)

稲田利徳

伊勢神宮の参詣を終えた作者耕雲が、帰路において見聞した、斎宮の辻の荒廃ぶりと絵馬掛けの民俗行事、海辺での海人達の辛苦の生活、鈴鹿山を越えた所にある三つ子塚、それに「夜這ひの松」の由来などに対して、自己の思念を重ねて綴った紀行文を、神道・儒教・仏教などの視点を導入しながら、「語釈」「通釈」「考」に区分して総合的に注釈を加えた。

Keywords : 斎宮・海人・伊勢・松

この注釈は、前稿「『耕雲紀行』注釈(一)(二)(三)」(研究集録、第百五号、第百六号、第百七号)に続くものである。念のために、凡例を再録しておく。

凡 例

一、本稿は耕雲の紀行文「耕雲紀行」の注釈である。
一、底本は東京大学史料編纂所蔵本(貴41・2)で、次の方針に従って校訂本文を作成した。

- (1) 漢字・仮名を原則として通行の字体に変え、新字体のある漢字はそれを用い、濁点、句読点を施した。
- (2) 底本の仮名を漢字に改めた場合は、表記を改めた本文の右側に、もとの仮名を記した。漢字の訓みを()の内に示したものもある。
- (3) 仮名遣いは原文のままとし、送り仮名を補った場合は()内に記した。また歴史的仮名遣いと一致しない場合は、()を付して歴史的仮名遣いを傍記した。ただし、仮名に漢字を宛てた場合は、これを省略した。
- (4) 反復記号は底本のままとし、踊り字の場合はもとの仮名に直し、右側に「、」を付した。
- (5) 底本の丁数などは省略し、本文も適宜改行した。
- (6) 虫損などで判読するのに、やや支障をきたす箇所は□とし、その中に推

定した文字を記した所もある。

- (7) 本文の不審な所には、(ママ)を付した。

- (8) 全体を適当な個所で区切り、通し番号と内容に即した見出しを付した。

一、注釈は「本文」「語釈」「通釈」「考」の順序で進める。

一、「耕雲紀行」の翻刻を御許可くださった東京大学史料編纂所に対し、厚くお礼を申し上げます。

* * * *

岡山大学教育学部国語教育講座、七〇〇一八五三〇 岡山市津島中二一ー一
An Annotation of "Kōunkikō" (Part Four)

Toshinori INADA; Department of Japanese Language Education, Faculty of Education, Okayama University, Tsushima-naka, Okayama 700-8530.

十三 齋宮跡の荒廃

廿四日卯の終り程に山田を出づ。宮川を渡りて、遙かに還り申（し）するとして、

天照す光は四方を漏らさねば今日別るとも神は思はじ

こゝかしこ行き過ぎて、齋宮の辻といふ所あり。昔の齋宮の跡なり。木竹繁りあひて、いづくとも見えぬ藪のうちなり。荒て久しけれども、今もそのしるしに、空より絵馬をかくること絶えず。これによりて、土俗、あるひは絵馬の辻ともいふとかや。先々は聞ず、この度の下向に、案内者ありて語りしかば、昔の事ども思（ひ）出づる中に、龜山院の御代かよ、齋宮群行の時、高祖父内大臣の甥長雅大納言、長奉送使勤めたりしぞかし。近比は、この礼もすたれぬれば、この藪の内を訪ねとふ人もあらじかしと、あはれにて、

都人ここに齋の宮荒れて絵にかく馬のいさみな世や

雲津のほとりに、星逢の里といふ所あり。この名もさだめて故ありけむと覚（え）て、

天地の別れぬ先の名やとめし伊勢路に残る星逢の里

〔語釈〕○卯の終り程―現在の午前七時近く頃。○山田―既出。○宮川―既出。○「天照す」の歌―「天照す光」とは、全世界を照す光で、ここでは伊勢神宮の祭神の天照大神の慈悲の光の意も込める。恵みの光は天下に遍く降り注がれるので、たとえ今日、神宮の地を離れても、神は私を失礼であるとは思われないであろうという意。伊勢神宮への絶対の信仰の表明。○齋宮の辻―この場所は「昔の齋宮の跡」とあるように、現在、三重県多気郡明和町大字齋宮・同竹川に所在。○空より絵馬をかくること―「空より」の実態は不明だが、空

中から、上からの意で、樹木の枝などから絵馬を掛けたものか。「絵馬」は祈願や報謝のために、社寺に奉納する絵の額。馬または木馬を奉納する代りに馬の絵を描いたが、後には馬以外の画題を扱った。これは、「齋宮の絵馬掛け」のことで、十二月晦日の夜、三重県多気郡の齋宮村の小さな祠に、稲を描いた絵馬を掛けて、疫病神を祭り、合わせて明年の吉凶を占うという行事と脈絡を有するであろう。この行事は、同所が齋宮の旧跡なので、昔齋宮で十二月晦日の大祓に絵馬を掛けた例に倣ったものとされる。この「耕雲紀行」の記述は、当時の民俗行事の実態を示唆して貴重である。○土俗―その土地の人。○あるいは絵馬の辻―絵馬を掛けることから、「齋宮の辻」を「絵馬の辻」と別称した意。○先々は聞かず―作者耕雲は、これ以前に二度にわたり伊勢参詣を体験していたが、そのときには「齋宮の辻」のことを仄聞しなかったという意。○龜山院―第九十代の天皇。一二四九年―一三〇五年。名は恒仁。後嵯峨天皇の皇子。元寇の際、身を以て国難に代ろうと伊勢神宮に祈願。後宇多天皇に譲位後、一二八七年（弘安十年）まで院政を執る。○齋宮群行―齋宮卜定の後、野宮で潔斎し、九月上旬に禊祓の儀をすませて宮中に入り、ここで天皇から「別れの櫛」を額髪に戴いた後、齋宮は輿に乗り、百官が奉送して伊勢に発向する儀礼。○高祖父内大臣の甥長雅大納言―「高祖父内大臣」は花山院師繼のこと（既出）。長雅は花山院長雅（一二三六―一二八七）のことで、右大臣定雅公男。○長奉送使―齋宮卜定三年目の九月、天皇に別れを告げた齋宮に群行して伊勢まで奉仕する役。長奉送使は、普通、中納言か参議一人、弁・史・中務丞各一人であるが、路次の警固のため、検非違使や看督も付けられた。なお龜山院の時の齋宮は、後嵯峨法皇女の愷子内親王（在任、弘長二年―文永九年）で、文永元年に齋宮群行が行われているので二所太神宮例文、長雅が長奉送使を勤めたのは、その時と思われる。○この礼もすたれぬれば―齋宮の礼式は、後醍醐天皇の時代に廃絶されていた。○「都人」の歌―「齋の宮」といつく（斎く）を掛ける。「荒れる」と「馬」とは「意馬心猿」（煩惱・欲情のおさえた）いのを、馬の奔走し、猿のさわぎたてて制しがたいのにたとえていう語）とかかわって縁語。○雲津―既出。○星逢の里―旧名「星逢」から七夕の鵲に取り合わせて「鵲村」と改称し、現在は三雲村という。三重県の雲出川の南岸に位置、東は海浜。参考歌「ほしあひの里いかにあふぐらんとしに二たび君を待（ち）見て」（室町殿伊勢参宮記）。○「天地の」の歌―「星逢の里」という地名に、中国伝来の七夕伝説を連想、「天地の別れぬ先」、既ち天地開闢以前の地名が、この伊勢路に残ったのかと詠じた。

〔通釈〕二十四日、午前七時前頃に山田を出発する。宮川を渡って、遙か遠くから返礼をして、

天照大神が天下を照す光は、四方に漏れることもなく遍く降り注ぐので、たとえ今日、ここでお別れしても、神は別段、なんとも思われまい。

あちらこちらと通過して行くと、斎宮の辻という所がある。その昔の斎宮寮の跡である。木や竹が繁茂し、どこがその旧跡かわからない藪の中にある。荒廃してから久しい歳月を経たけれども、今でもその旧跡のしるしとして、空から絵馬を掛ける習俗が絶えず続いている。これによって、土地の人は、ここを絵馬の辻と呼んでいるとか。先途の参詣のときには聞かなかったが、この度の下向の際には、この旧跡に案内する者があって、このことを語ったので、昔のことなど思い出すなかに、龜山院の御代であつたらうか、斎宮群行が催行された時、高祖父内大臣の甥にあたる長雅大納言が長奉送使を勤めたことがあつた。近頃はこの礼式も廃れてしまったので、この藪の中を訪ねて問う人もいないだろうと、感慨無量となつて、

都の人が潔斎して、ここに造つた斎宮寮もすっかり荒れ果ててしまい、今では絵に描いた馬（絵馬）のように、勇み立つこともない世になつたことよ。

雲津の辺りに、星逢の里という所がある。この地名の由来も、さぞかし由緒があつたのであらうと思われて、

伊勢路に今も残っている星逢の里は、天地開闢より以前の地名をとどめているのであらうか。

〔考〕 斎宮寮の旧跡の荒廃ぶりを記しているが、「室町殿伊勢参宮記」にも、「斎宮の御跡は此あたりにて侍るよし人の申に、よそながらみたまつれば、木竹いみじくしげりあひたるばかり也」と同様な描写がなされている。さらに康永元年（一三四二）の坂十仏の「太神宮参詣記」には「斎宮にまいりぬ。いにしへの築地のあととおぼえて、草木の高きところあり。鳥居はたふれて朽のこりたる柱のみちによこたはれるを人だにもかくとしらせずは、たゞふし木とのみぞ見てすぎなまし」と、耕雲が訪れる以前の、築地・鳥居・柱などの崩壊したさまが描写されていて参考になる。○愷子内親王の斎宮群行の際、花山院長雅が長奉送使を勤めたとの思い出は、先述した花山院兼雅・師継らが公卿勅使を勤めたことと連動し、花山院家と伊勢神宮との信仰の厚さを強調するものである。

十四 綾蘭笠から浦伝いの路へ

とばかり行（き）過ぎて、綾蘭笠といふ所あり。此（の）笠を売る故に、かく名付けけむかし。近比、こなたかなた争ふことどもありて、近きあたり、兵物のまぎれに、見しよりも荒れぬめり。

秋風に晴れ行（く）雲の綾蘭笠時雨ぬ今日はきてもかひなし

そこを行（き）過ぎて、浦伝ひの路、潮焼く海人のしわざ、辛き世を渡る住居も、あはれにはかなけれど、あり果てぬ命待つまの老の波は、かかる所なりとも、なにかは住み憂からんと、目留まりて、

苦屋葺く海人の刈藻のかりの身はここにも住まむしばかりぞ

侘びぬれば我も憂き世を捨衣いざ浦馴れむ伊勢の海士人

漁りするわれから海士の身をかはば藻に住む虫と又や恨みむ

生死流転の苦海、一度は浮かび、一度は沈む。いつを限りの夢の中の迷ひ地ならむ。今宵も、ありし安濃の津の導場に宿る。近習伊勢守近き程に泊りて、来たり訪ふ。

明くる日は、廿五日なり。明け方近うなりぬるなるべし、ここもかしこも起き騒ぎて、出で立つ程、火焚き屋赤く、人の声も物騒がしかりしに、急ぎ立つ朝餉の煙むすばほれ下屋に高き旅人の声

〔語釈〕○綾蘭笠—現在、この地名の所在は確認できないが、「星逢の里」を通過して、まもなくの所とするので、道程からみて、「星逢の里」と「安濃の津」の途中、雲出川の近辺にあつたと推測される。「室町殿伊勢参宮記」にも、往路のときに「雲津川にて」と和歌を詠じた後に、「夜の明ゆくほどに、あやみがきと申所につきぬ。日かげことにあきらかにさし出て、昨日の雨のなごりもなく

晴わたりぬ。雨はれて後はあやなしあやみがさけさの日影のさす名ばかりか」とみえる。○此の笠を売る故に：この地名は、綾蘭笠（蘭草を綾の組織にならって編み、裏に絹を張って作った笠）を売っていることによるとの意。○争ふことども「耕雲紀行」は応永二十五年の執筆なので、伊勢国近辺の「近比」の争いといえば、応永二十一年九月、伊勢国司北畠満雅が、北朝方即位を不満として挙兵を図り、翌二十二年四月、幕府が一色義範をして満雅を討たせた事件などを指すか。○「秋風に」の歌―地名「綾蘭笠」に笠を、「きても」に「着ても」と「来ても」を各々掛ける。また「綾蘭笠」を雲に比喻し、秋風で空が晴れて時雨が降らないので、綾蘭笠を被ってもその甲斐もないことと、この土地にやって来ても、荒れて見る甲斐もない両意を込める。○そこ―綾蘭笠。○浦伝ひの路―これは、「はるかにも思ひやるかな知らざりし浦よりをちに浦伝ひして」（源氏物語・明石）の表現を念頭にする。○潮焼く海人のしわざ、辛き世を渡る住居―「辛き」は辛い、苦しい意だが、先の「潮焼く」から「塩辛い」の縁語。潮焼く海人と「辛き」とを結びつけた参考歌「志賀の海人の一日もおちず焼く塩の辛き恋をも吾はするかも」（万葉集巻十五）。「すまのうらにあまのこりつむもしほ木のからくもしたにもえわたるかな」（新古今集・恋一・藤原清正）。○あり果てぬ命待つまの老の波、かかる所なりとも―あり果てぬ命待つまの」は「有りはてぬいのちまつまのほどばかりうきことしげくおもはずもがな」（古今集・雑下・平貞文）に依る。「老の波」は年齢を重ねることを波に比喻した語で、次の「かかる」は波が「かかる」と「このよう」の意を掛ける。○「苦屋葺く」の歌―「苦屋」は苦で屋根を葺いた粗末な住居。「かりの身」の「かり」は藻を「刈り」と「仮りの身」の連鎖掛詞。参考歌「たれゆゑあまのかるものかりにだにかわくまもなき袖と成りけん」（延文百首・通相）。○「侘びぬれば」の歌―「捨て」は「憂き世を捨て」と「捨て衣」の連鎖掛詞。「捨て衣」と「馴れむ」は縁語。参考歌「すずか山いせをのあまのすて衣しほなれたりと人やみるらん」（後撰集・恋三・伊尹朝臣）。○「漁りする」の歌―「われから」は「我から」と節足動物の一種で、海藻に付着する虫「われから」を掛ける。本歌「あまのかるものにすむむしの我からとねをこそなかめ世をばうらみじ」（古今集・恋五・典侍藤原直子朝臣）。○生死流転―迷妄のために衆生が三界六道の間を生死を重ねて、迷いの世界をさすらうこと。○苦海―生死・苦悩が海のように果てしなく広がっている人間の世界。○安濃の津の導場―「その夜は、安濃津に着きぬ。念仏の導場に宿る」と往路の際に既出。この「導場」は、津市一身田町にある専修寺のことかと推測した。○近習―既出。○伊勢守

―伊勢貞経のこと。貞経は貞行の子で伊勢守、従四位下兵庫頭。のち家督を貞国に譲って吉野を拝領する。法号勢元（伊勢系図など）。○火焚き屋―衛士が庭火や篝火などを焚いて見張りをする屋舎。○「急ぎ立つ」の歌―「朝餉の煙」は朝食の準備をするときの煙。「下屋」は、普通、寝殿造りの主殿の後ろに造った女房や童などの召使いが住む建物だが、ここは旅先なので、召使い達の宿泊した小屋のことだろう。

「通釈」しばらく行き過ぎると、綾蘭笠という所がある。綾蘭笠を売っているで、このように名付けたのであろう。近年はあちこちに争いごとなどがあつて、この近辺も兵乱に巻き込まれ、以前見たときよりも荒廃したらしい。

秋風に吹かれて晴れて行く雲のような綾蘭笠を被っても、時雨の降らない今日はその甲斐もないことよ（荒れた綾蘭笠に来ても見る甲斐もない）

そこを行き過ぎて、海岸沿いを行く路に、潮を焼いている海人の生業や辛き世を渡る住居を見るにつけ、哀れさや儂さを催すけれど、いつまでも生き続けられずに臨終を待っている私の老いた身には、こんな所であつても、どうして住み辛いことがあろうかと、その光景に目を留めて、

苦屋に暮す海人が藻を刈るという、その刈るではないが、仮りの身である私は、こんな所でも住みつこうと思う、所詮、しばらくの仮りの世にすぎないのだから。

世を侘びているので、私もこの憂き世を捨てて僧衣をまとっているのだ。

さあ、伊勢の海士人よ、この浦で一緒に馴れ親しもうではないか。

漁りをして殺生することと、自分から海士が来世に身を変えようと、今度は藻に住む虫になったと、また恨むであろうか。

生死流転を繰り返す迷いの世界に、一度は生まれ、また一度は死んで沈んで行く。いったい、いつまで無明長夜の夢の中にさ迷い続けるのであろうか。今宵も、先々の通り、安濃の津の導場に泊った。主君に仕える者や伊勢守貞経が將軍の宿泊所に近い所に泊っており、こちらにやって来て挨拶する。

翌日は二十五日である。夜明け近くなったのであろう、こちらでもあちらでも起床して騒ぎ立てて旅立ちの準備をする間、火焚屋は赤く、人々の声も物騒がしかったので、

旅立ちの準備のさなか、朝食をつくる煙が結びあつて上り、下屋には旅人の声々が高く響いていることだ。

〔考〕○浜辺で潮焼く海人達の生業を見て、辛い渡世を実感するのは、ごく平凡な感慨かもしれない。「室町殿伊勢参宮記」にも「しほやはかず／＼みえわた

れるに、海人ども行ちがひて、しほくむもあり、やくもあり。又塩木はこぶさ
まも、をのがじ、いとなむけしきいとあはれにみえ侍り。しほ木こりしほやく
あまもくむ人もからき世わたるわざはかはらじ」と、類似的の觀察が記されてい
る。ただ耕雲の感慨が特異なのは、「生死流転の苦海」という仏教思想を痛感
し、海人達の立場を自分と同質ととらえ、老先短い世捨て人の我が身は、この
浦辺に住んで、海人と生活をともにしても辛くは思わないだろうと吐露してい
る点である。

十五 三つ子塚への感慨

鈴鹿地になりて、山又山を分け入る程、又さらに心細し。峯に三(つ)
並べるを問へば、三つ子塚と答ふ。三人の子を埋みけるにや。

悲しさを聞きてぞ今日も三つ子塚埋めぬ名は憂き世なりけり

哀れとはある世ばかりや三つ子塚二人の親も又苔の底

鈴鹿河を八十瀬といひならはせり。なにとなく数へてもてゆけば、瀬の
数ことの外に少なし。何事も昔に変わる習ひなれば、埋ぞかしと覚えて、

数ふれば八十瀬に足らぬ鈴鹿河水も昔の道や絶ゆらむ

鈴鹿川又振り捨てて帰るさは八十瀬の波を袖にかけつつ

廿一日の夜の雨に、徒歩人多く足を損じて、ともすれば行(き)遅れが
ちなり。今日の道ことに行(き)にくし。「暮れぬさきに」「急ぐべし」な
ど言ひしろふを聞きて

駅屋路や月なき比の鈴鹿山夜は越えじと急ぐ旅人

〔語釈〕○鈴鹿地―既出。○三つ子塚―滋賀県甲賀郡土山町三子山。甲賀郡土
山町大字笹路の東南方の山。滋賀・三重両県境にあり、三兎山、三神山、三箇
山とも記す。標高五五三メートルの三子山をはさんで二つの峰が連なる。○三

人の子を埋みけるにや―この地名由来は耕雲自身の臆測か、それとも地元の人
から仄聞したのか判然としないが、「けるにや」の表現からすると前者か。『三
国地誌』には「杜家伝ニ云、鈴鹿ハ片山神社トテ、三子ノ嶺ニアリ、三子トハ
鈴鹿嶽、武名嶽、高幡嶽是也、瀬織津姫、伊吹戸主、速佐須良姫此三神ヲ祭ル
ト云。三子山回祿ノ後、寛永十六年此地ニ遷シ祭ル、三神出現ユヘ、三子ノ名
アリ……」(日本歴史地名大系引用)とする。○「悲しさを」の歌―「三つ子」
に「見つ」を掛ける。「悲しき」とは、三人の子を埋めたという臆測を背景とす
る。参考歌「もろともに苔のしたにもくちもせうづまれぬなを見るぞかなし
き」(金葉集・雑下・和泉式部)。○「哀れとは」の歌―「ある世ばかりや」と
は、三人の子を埋めた両親が「哀れ」と思ったのは、生きている現世の間だけ
という意。「苔の底」は墓の下、草葉の蔭のこと。○鈴鹿河―既出。○八十瀬―
たぐさんの瀬の意。参考歌「鈴鹿川八十瀬渡りて誰ゆゑか夜越えに越えむ妻も
あらなくに」(万葉集・巻十二)。○何事も昔に変わる習ひ―一般通念として述べ
たもので、特に典拠を踏まえたものではなからう。○「数ふれば」の歌―鈴鹿
河の瀬を数えると八十瀬に足りないことを詠じ、その原因を、昔の水の道が絶
えたのかと推測する。「新後拾遺集」(雑春・橘遠村)の「すずか河あらぬなが
れも落ちそひてやせにあまりる五月雨の比」の歌とは逆発想。○「鈴鹿川」の
歌―「鈴鹿川」の「鈴」と「振り」、「波」と「かける」が各々に縁語。参考歌
「ふりすてて今日は行くとも鈴鹿川八十瀬の波に袖はぬれじや」(源氏物語・賢
木)。○廿一日の夜の雨に―復路で鈴鹿川を渡ったのは二十四日のことなので、
「廿一日」とは不審だが、これは出発の朝の九月二十日に、「二十日の夜より雨
いたう降る」、ついで「雨いたう降りて、道の程いづくとも見えわかず」とある
ところからして、往路のときの雨を指しているのであらう。○今日の道―二十
四日の復路を指す。○言ひしろふ―互いに声を掛けあっている意。○「駅屋路
や」の歌―「駅屋路」は駅に設けられている街道。駅は令制により、唐の駅通
制度に倣って設けた宿駅。本歌「ゆふぐれのまがきは山と見えなむよるはこ
えじとやどりとるべく」(古今集・離別・僧正遍昭)。

〔通釈〕鈴鹿路になつて、山からさらに山に分け入って行くにつれ、また一層
心細くなる。峯が三つ並んでいるのを尋ねると、三つ子塚だと返答する。三人
の子供を埋めたのであらうか。

三人の子供を埋めたという悲しい話を聞いて、今日も三つ子塚を眺めたが、
子供は埋めなくても、埋づもれぬ名(噂)の残るのは憂く辛い世であること
よ。

三人の子を埋めて悲痛だと思ふのは、生きている現世の間ばかりであろうか、子を埋めた二人の親もまた、子と同じように死んで、苔の底に埋まっていることだ。

鈴鹿河を八十瀬と言ひ慣らわしている。なんということもなく数えてゆくと、瀬の数が思ひのほか少ない。何事も昔とは変つてゆくのが世の中の常であるので、それをもっともと思われて、

瀬の数を実際に数えてみると、八十瀬には足りないことだ。鈴鹿河の水も昔流れていた道が絶えてしまったのであろう。

鈴鹿川をまた振り捨てて帰る際には、八十瀬の波をかけるように、離別の涙で袖を濡らすことだ。

二十一日に降った夜の雨のために、徒歩で随行する人の多くが足をとられ、とかく進行が遅れがちである。今日通過する道路は、殊に歩行が難儀である。「日が暮れないうちに通過したい」「急いで通ろう」など、互に声を掛けあつてゐるのを聞いて、

駅路では、月の照っていない頃の鈴鹿山の夜道を越えることはしたくないと、旅人が旅路を急いで行くことだ。

【考】○「三つ子塚」と呼称するのを聞いて、耕雲は「三人の子を埋みけるにや」と推測している。「語釈」でも述べたように、これは地元の伝承を仄聞したのではなく、彼自身の想像によるものだろう。そう判断したのは、「三つ子山」ではなく「三つ子塚」と「塚」＝墳墓と解したためであらう。「三つ子塚」と聞き、三人の子を埋めた故かと臆測するだけでなく、続いて詠じた二首の和歌の内容からみると、両親が自身の手で我が子三人を埋めたものと想像を逞しくしており、その点、彼の、いかにも歌人らしい資質を示す。恐らく、親が三人もの子を埋めたのも、病死などによるものではなく、生活苦からくる口減しなどのため、強いて埋めざるを得なかった哀話を想定していた気配がある。

十六「夜這ひの松」の伝承

近江のうちになりて、野原の傍に、枝の一方へ靡きて、大きやかなる松一もとあり。この松の名を「夜這ひの松」となむいひけり。昔、筑紫の宮崎の松、伊勢の国、別府の松を思ひて通ひけるが、この所にて、夜明けけれ

ば、ここに根を差しとどめけると、言ひ伝へたり。この事、今日ぞ初めて聞きつる。いと珍かなる事なれば、後にも伝へんために、詠み侍（り）し。

通ひける心づくしの深緑来ても根させよ別浦の松

別浦に夜這ひの枝の末垂れて明くる侘びしき宮崎の松

別府の松とも、別浦の松ともいふなり。

この事、妖怪に似たれども、幻化の世界、もとより定相なし。虞美人も草となる。望夫女も石となる。怨女は女郎花となりて、一時をくねる。童男女は松となりて、連理の枝を交す。草木の性霊、夫婦の志を交さむ事も、又疑ふべからず。神奇は臭腐となり、臭腐は神奇となる。有情非情同牀の仏性あれば、何ぞ必ずしも、これを怪しまむ。その夜は水口に泊まる。

明くる日、ここかしこ通りし中に、上田といふ里あり。秋の生業、民の営み、賑へるさま、所にしたがひて、なにのをかしき海山の景もなければ、又思ひつづけし。

水波つき植し上田を刈り果てて声こきまざる賤が稲歌

【語釈】○近江―旧国名。今の滋賀県。江州。○枝の一方に靡きて―松の枝が一つ方向にのみ靡いている形からして、後に続く、宮崎の松の恋慕のスタイルと絡めて伝承してきたのであろう。○「夜這ひの松」―「夜這ひ」は求婚する意だが、伝承によると、筑紫の宮崎から伊勢の国まで夜中に通つたとするので、「夜に恋人のもとに忍んで行った松」の意を込めての命名だろう。○筑紫―筑前・筑後を指す。○宮崎の松―宮崎宮（福岡市東区箱崎にある元官幣大社）にあった松。昔、神功皇后が宇美（粕屋郡）で応神天皇を産んだ時、その胞衣を

管に入れて埋め、その印に植えた松を「管松」と命名、その松が管崎宮の境内にもある。○別府の松―「別府」は、現在の三重県安芸郡河芸町別保のこと。この地名は鎌倉期から見え、「別府」とも書いた。○夜明けければ、ここに根を差しとどめける―「夜這ひ」は夜の世界の行動であり、夜明け、即ち黎明の時は、霊の退散する時刻とされる。恐らく「管崎の松」は、夜中、人の姿と化して別府の松の所に通っていたのではなからうか。○今日ぞ初めて聞きつる―今日初めてとしたのは、これまでの二度の伊勢参詣の際には仄聞しなかった意。○「通ひける」の歌―「心づくし」の「つくし」に「筑紫」を、「深緑」の「深」に「心づくしが深い」を掛ける。後文に「別浦の松」は「別府の松」と同一とするので、この歌は、別府の松に向い、ここに来て根を差し、夫婦の松となれと呼びかけたことになる。○「別浦に」の歌―「明くる」は「管」の縁語。夜が明けたために、恋情を成就できなかった管崎の松への憐憫の情を詠ずる。参考歌「いはばしのよるの契もたえぬべしあくるわびしき葛木の神」（拾遺集・雑賀・春宮女蔵人左近）。○別浦の松―この呼称からすると、「別浦」は地名で「別府」の近くかと推測されるが未詳。○妖怪―ばけもの。妖鬼。ここは恋慕の情を抱いた松を指す。○幻化―仏教語で、幻人のしわざと仏・菩薩の神通力のつくり出したもの。○定相―仏教語で、常住不変の相。○虞美人―楚の項羽の寵姫。虞姫。項羽が垓下で敵に囲まれたとき、項羽の詩に和して舞い自殺したという（史記・項羽本紀第七）。○草となる―「虞美人草」は、楚の項羽に殉じた虞美人の墓の上に生えた草という伝説がある。○望夫女も石となる―中国湖北省武昌の北山の上に、望夫石があり、これは古く貞女が戦場に赴く夫を、この山上から見送り、その惜別の余り、化して石になったとの伝承がある（神異記・唐物語第十二話など）。○怨女―年ごろになってまだ結婚できない女。君主の寵愛を失った女。○女郎花となりて、一時をくねる―「女郎花」は、秋の七草の一つ。秋、黄色の小花を多数つける。和歌では多く女性に比喩。「くねる」とは、恨みかこつ意。ここは「古今集・仮名序」の「男山の昔を思ひ出でて、女郎花のひと時をくねるにも、歌を言ひてぞ慰めける」に依る。○童男女は松となりて、連理の枝を交す―「連理の枝」とは、根や幹は別の木で、枝が続いて一つになっているもの。夫婦や男女の契りの堅い比喩。参考「在天願作比翼鳥、在地願為連理枝」（白居易・長恨歌）。童の男女が化して松となった類話は、所々に伝承されているように思われるが、「常陸風土記」の話などはその例。（考）参照。○性霊―魂。精気。○神奇は臭腐となり、臭腐は神奇となる―「神奇」は神妙不可思議なもの。「臭腐」は腐ったもの。ここは「莊子」（知北遊）の「是

其所美者為神奇、其所惡者為臭腐、臭腐復化為神奇、神奇復化為臭腐」に依拠したもの。○有情非情同歸の仏性あれば―「有情」（心を有する生きとし生けるものすべての総称）も「非情」（心を所有しないものの総称。草木・山川など）も、ともに区別なく、仏性を有すること。「仏性」とは衆生が本来有しているところの、仏となる可能性。大乘の「涅槃經」に「一切衆生悉有仏性」の句で表現されたものが初出という。この、「有情」も「非情」も、ともに仏性を所有するという耕雲の考えは、「莊子」（知北遊）に「東郭子問於莊子曰、所謂道惡乎在、莊子曰、无所不在、……在稊稗、……在瓦礫、……在屎溺」とあり、この「道」が仏教の菩提の意識語として用いられたことから、仏性は在らざる所が無く、草木土石の非情の物にも在るとする論議が、隋唐の天台仏教学で展開されるようになったが、そういった流れを受けたものである。○水口―既出。○上田―滋賀県近江八幡市に上田町があるが、そのことか。○所にしたがひて、なにのをかしき海山の景もなけれど―この描写は「源氏物語」の、「所につけては」（須磨）、「近き所には、播磨の明石の浦こそ、なほ、殊に侍れ。なにの、いたり深き隈はなけれど、海の面を見渡したるほどなむ、あやしく、こと所に似ず、ゆほびかなる所に侍る」（若紫）などを念頭にしたもの。○「水波つき」の歌―「水波」は水に浮いている浪のようなもの。水あか。「上田」に地名を込める。「稲」と「く」は縁語。「声こきまざる」は声を合わせて高く歌う。参考歌「衣手に水波つくまで植ゑし田を引板わが延へ守れる苦し」（万葉集・巻八）。【通釈】近江の国に入ると、野原の傍に、枝が一つの方向に靡いている大きな姿の松が一本ある。この松の名を「夜這いの松」というのだそうだ。その昔、筑紫の管崎の松が、伊勢の国の別府の松を恋しく思つて通つていたが、この所で夜が明けてしまったので、ここに根を差しとどめたのだと言い伝えている。この話は、今日、初めて聞いたことである。大へん珍しいことなので、後世にも言い伝えるために、次のように詠じた。

筑紫の管崎の松は、心を尽して、深い緑の枝を垂れているが、別浦の松よ、ここにやつて来て、根をとめて夫婦の松となれよ。

管崎の松は、別浦の松に夜這つて求婚に出かけ、ここに跡を垂れたが、さぞ夜の明けるのが侘びしかったろう。

その松は、別府の松とも別浦の松ともいうらしい。

この話は、妖怪に似ているけれども、この世は幻化の世界、元来、常住不変の相があるわけではない。虞美人も死して草となる。望夫女も化して石となる。怨女は女郎花と化して、一時を恨みかこつ。童の男女も松に変じて連理の枝を

交す。このように草木の魂が、夫婦の思いを交すことも、決して疑うべきではない事実である。素晴らしい価値のあるものも、腐敗したものとなり、逆に腐敗したものが、価値のあるものとなることもある。有情なものも非情なものも、元来、同体で仏性があるので、どうしてこの話を怪しむ必要があるのか。その夜は水口に泊った。

翌日、そこを通過した中に、上田という里があった。秋の収穫時ということで、農民たちの活動の賑やかな様子は、場所がら、これといった情趣深い海や山の光景もないけれど、また、心のうちに思い続けた。

みさびを付けて苗を植えた上田の稲を刈り終えて、賤達が高らかに声を交しながら稲歌を歌っていることだ。

【考】〇ここでは「夜這ひの松」の伝承を詳記している点が留意される。松が松に恋慕したことを、「草木の性霊、夫婦の志を交さむ事も、又疑ふべからず」との思考を開陳するのに、人が草・石・女郎花・松と化した古来の故事を列挙している。これは、有情なものも非情なものとしたことのある証拠として提示しているのであるが、草木が人と化した故事は示していない。けれども、それに続いて、「莊子」の「神奇」と「臭腐」の交代現象や「有情非情」なものが同体で、すべて仏性を有するといった、老莊思想や仏教思想を述べることによつて、松と松との恋慕を怪しみ疑うべきでないと主張している。ここに宇宙に存在する、すべての物を同質なものとして認識する、作者耕雲の思想の一端が窺見できる。〇「童男女は松となりて、連理の枝を交す」の直接の典拠は不詳だが、類話が「常陸風土記」にみえるので、その該当部分を引用しておく。

（香島郡の浜の里）その南に童子女の松原あり。古、年少き童子ありき。俗、加味乃乎止古・加味乃乎止賣といふ。男を那賀の寒田の郎子と稱ひ、女を海上の安是の嬢子と號く。竝に形容端正しく、郷里に光華けり。名聲を相聞きて、望念を同存くし、自愛む心滅ぬ。月を經、日を累ねて、耀歌の會俗、宇太我岐といひ、又、加我毗といふに、邂逅に相遇へり。時に、郎子歌ひけらく、

いやぜるの 安是の小松に

木綿垂でて 吾を振り見ゆも

安是小島はも。

嬢子、報へ歌ひけらく、

潮には 立たむと言へど

汝夫の子が 八十島隠り

吾を見さ走り。

便ち、相語らまく欲ひ、人の知らむことを恐りて、遊の場より避け、松の下に蔭りて、手携はり、膝を役ね、懷を陳べ、憤を吐く。既に故き戀の積れる疹を釋き、還、新しき歡びの頻なる咲を起こす。時に、玉の露杪にやどる候、金の風丁す節なり。皎々けき桂月の照らす處は、唳く鶴が西洲なり。颯々ける松颯の吟ふ處は、度る雁が東岫なり。山は寂寞かにして巖の泉舊り、夜は蕭條しくして烟れる霜新なり。近き山には、自ら黄葉の林に散る色を覽、遙けき海には、唯蒼波の磧に激つ聲を聴くのみなり。玆宵玆に、樂しみこれより樂しきはなし。偏へに語らひの甘き味に沈れ、頓に夜の開けむことを忘る。俄かにして、鶏鳴き、狗吠えて、天曉け日明かなり。爰に、童子等、爲むすべを知らず、遂に人の見むことを愧ぢて、松の樹と化成れり。郎子を奈美松と謂ひ、嬢子を古津松と稱ふ。古より名を着けて、今に至るまで改めず。（日本古典文学大系『風土記』による）。

（未完）